



発行人
135-0047 東京都
江東区富岡 1-17-1-403
中島康夫
TEL 03-3630-1927
年二回発行

ホームページ
忠臣蔵会館
出版・校正・協力
テレビ製作協力
講演・史跡案内
URL <http://www.12-14.jp/>

あれから307年

逆説「悪書」の新型

ウイルス

理事長
中島康夫



近年、忠臣蔵を批判する悪書、いわゆる批判書が横行している。これは、全く新型ウイルスと同じ広がりを見せており、段々に人々をむしばんで行っているのである。特に、この新型ウイルスは、一応大学を出ているが、専門職でない中途半端なインテリ層に広がりを見せている。病院が全国に幾つも無いため、どんどん広がりを見せているのである。

更に、この新型ウイルスを助ける、悪玉菌が一部の出版社なのである。何の査定もなくその

いには唯々ビックリするばかりである。

作家とは、社会的に見てそんなに偉い職業ではないことを国民は悟るべきである。

作家とは嘘を書いてなんぼの職業である。

その作家連中が、元禄事件の基盤も知らずして、日本史そのものに入り込んで来て、ほとんどの国民は、何の抵抗もせず自分の思考に入れてしまふ。このことは、実に恐ろしいことである。作家の感性と歴史学の区別をできる人ならよろしいが、ほとんどの日本人は区別ができないのである。小生の耳に入って来るだけでも、

浅野は加害者なのに判官贖罪されている、浅野は精神の病である、吉良は被害者であつた、四十七士の討入りは就職運動だ、大石は討入りたくなかつた、

刃傷の原因は塩だ、等々

このような他愛もない嘘を流すのは、皆、作家たちである。

その結果、元禄事件に興味のあつた方々が、「そうだったのか、吉良さんが可哀想だ」といつて、義士会から去つて行った方も何人もいるのが現状である。

そして、それが次のような結果に現れてくるのである。

- (一) 泉岳寺始め、関係社寺への参拝者の激減
- (二) エンターテイメントの忠臣蔵取り組みの激減
- (三) 元禄事件研究の衰退
- (四) 各地義士会会員の激減
- (五) 忠臣蔵出版物の激減

などなど、テレビ番組に協力しても「たそがれ忠臣蔵」とネーミングされるほど、第三者から見れば、衰退の一端をたどっている世界に見えるのである。

これも、良く考えてみると「○説」「○○説」と遊んでいる内に、言論の自由の名の下に浅野はバカとか、吉良は名君といった、真逆の説にすり替わってしまったのである。更に、その

すき間に井沢氏のような低能な作家が入り込んで来てしまったのである。

恐らく、この錯乱を取り戻すには、大河ドラマの一つぐらいでは、永久性のカンバックは無理のところまで来ているのだと思う。

そこで、各会員あるいは、全義連の各会員にお願いしたいのは、各々が新型ウイルスの医者や赤穂義士の弁護士と思つて行動していただきたい。

それにつけても想い出されるのは、大石内蔵助の生前の思いである。大石は、討入りから切腹直前まで、多くの知人に、

「我々は、これから死んでいくが、死後いろんな人が良くも悪くも噂をするので、生き残っている皆さんは、そのところを宜しく口をつないでほしい」と、言い残して去つていったのである。

従つて、平成の世に生きながらえている我々関係者も、この「元禄事件の真相」を語り続けて行かなくてはならないと考える。

忠臣蔵は、ただ面白ければよいというものではない。

大石内蔵助辞世の句

理事長 中島 康夫

近年我慢がならず、一度会報に発表しなければ、との思いで筆を執った。
よく諸書に大石辞世の句として

あらたのし思いは晴れつ身は捨つる
うきよの月にかかる雲なし

と掲載されているのが絶対多数である。
従って、著者の定まらない編集部が手分けして原稿を作っている出版社などは、「あらたのし・・」を採用している。

元々の出所は「江赤見聞記」巻七に掲載されているので、そこが元であろうと思慮するところであるが、この「江赤見聞記」、只今は原本が不明で、主に活字本しか存在しておらず、従って実際のところは不明である。

というところで、散々世に「あらたのし」が出回り誰一人不審に思われないのが今日この頃である。

であるからして、漫画家の黒鉄ひろし氏などはテレビ出演の場で「あらたのし」が大石内蔵助の心情がチラリと見えてくる、などと得意げに話している。

あの程度の知識で、忠臣蔵は論じてほしくないものである。

ところがである。「江赤見聞記」より執筆がやや早いのではないかと推測される「易水連袂録」には、四十六人辞世詩歌並発句之事として、

末期 大石内蔵助
あら楽や思ひは 晴るる身を捨る
うき世の月に かかる雲なし

とある。これは大石が討入りから切腹までの間に、いつ発句したのか不明ということである。しかも、「あらたのし」ではなく「あら楽や」である。たのしと楽やでは大きく意味も異なってくる。

「あらたのし」では、討入りが成功して心が逸つているととれる。

「あららくや」では、討入りが思いの外楽に済ませることができたと解釈される。

そこで、この「あららくや」を裏付けるもう一つの発句を大石は残してしてくれたのである。

大石が、切腹の前々日二月二日、細川家下屋敷より儒者細井広沢へ出した書状が残っているので、その一文を左に示す。

一筆啓上候、先以旧冬は色々預御厚志御蔭を以て其夜兼て存立候通同志相催上野介殿屋敷へ打入、手向候家来は切捨如本意上野介殿討取、印は泉岳寺へ致持参備亡君顔前去春以来の散鬱憤大慶御察貴丈にも御満足可被下候、折節上杉御人数打出不申半弓其外大勢を防ぎ候道具無益に成おかしさに

覚悟した程にはぬれぬ時雨かな

夫より吉田忠左衛門・富森助右衛門を以て仙石伯耆

守様御屋敷へ訴出候処、翌夕公儀御評定之上皆共儀諸侯御四家へ御預に相成候内、拙者共十七人は細川公白金屋敷へ罷在誠以て日々御馳走共冥加至極難有仕合に御座候、最早近々罪品可被仰付と相待罷在候、段々武運に御叶候儀本望不可有上候、此趣京都寺井玄溪宅へは貴丈より御通達御頼申候、尤皆共ケ様に罷成候跡にて定て世間取々之雑説可有之、年月之寸志能々御存之貴様に候間、其時相応之噂可被下候、第一芳志と頼置候、右御礼旁為可得御意余命之内如此認置候、恐々謹言

二月二日 大石内蔵之助(花押)
細井次郎太夫様

これは、

「先ず旧冬は色々御志をいただいて、お陰をもって十二月十四日かねての通り上野介殿屋敷へ討入り、吉良家の家来は切捨、上野介殿は討取り、首は泉岳寺へ持参致し、内匠頭一昨年来のうっ憤をはらしました。察するところ、広沢殿も御満足下されるでしょう。討入りの際も、上杉家は人を出さず、大勢を防ぐための弓や戦いの道具を用意しましたが、無益になり少しばかりおかしく思いました。

討ち死も覚悟しましたが味方の被害も少なく、思ったより楽に討入りは終わつたと思います。

討入りが終わってから吉田と富森二人で、仙石邸へ自訴したところ、同日評定の決定で、同志は大名四家へ御預りになり、我らは十七人細川家下屋敷にあり、毎日御馳走を頂いて有りがたく思っています。もはや、近々罪状を仰せ付けられると思ひ、待つております。

このような結果になつたことも本望であり、この結

果を京都の寺井玄溪へあなた様より知らせて下さるよう頼みます。もっとも同志の始末が終わったあととは、世間ではいろいろいわれるでしょうが、この二年間の我々の志をよく知っておられる貴方は、相応のお話をして下さい。そのことを第一にお願い致します。右の御礼かたがた余命のある内にお願ひしたく認めました。謹んで申し上げます」

とある。この文面を目視すれば、討入りは四十七士が思っていたよりは楽に済んだことが伺い知れよう。

とすれば、考えられるのは、討入り後、レポートになり切った「易水」の作者が、年齢も顧みずに走り回り、細川家へずかずか上がり込み、大石に逢い探り出している姿が目に見えぬ。

ともあれ、この二月二日の大石が広沢へ書した一文を見れば「たのし」か「楽」か判断が付きそうなものである。

なにより、「易水連袂録」には、

「あららくや」と謳っているのである。

追記（反省も含め）

以上のような文章を発表している小生も十年ぐらい前までは「あらまし」と信じ込んでいた時期があり、汗顔の至りである。

更に、小生は近年になり、他の会員より誤りを指摘されることが間々あった。

例えば、平成十七年に「赤穂義士の引揚げ」を発売した際、富岡理事より葛飾北斎の「万年橋」（浮世絵）の橋下に描かれてある「高橋」を、赤穂義士が引揚げの際に渡った霊岸島の高橋と勘違いして文章を進めていたことを指摘された。

高橋が二つ存在したのである。

それから、参与の古賀宣子さんから指摘を受けたことであるが、現在「多摩川」と呼んでいるが、江戸時代は「玉川」であったことなど、己の間違ひは「知るは一刻の恥」で、誤りは即座に認めた方が、身の為であると悟っている次第である。

（財）中央義士会創立一〇〇年記念出版

「渡辺忠臣蔵」

大石内蔵助編

平成の世に初めて発表される渡辺世祐博士の遺稿。昭和一〇年ころより発表された、斯界第一人者の元録研究全ての基礎。これを読まずして「忠臣蔵」は語れません。

平成二十一年十月二十三日発刊 五〇〇部限定
定価一、〇〇〇円（税込） 送料一〇〇円
編著・出版（財）中央義士会
TEL（〇四八）九九三―二五九一
FAX（〇四八）九九三―二五九二

（財）中央義士会創立一〇〇年記念出版

「反論忠臣蔵」

不良出版物に対しての批評。一般質問者への回答。中央義士会へ参りました喫緊の応答、新聞投稿欄への反論などが、読みやすく編集されております。必見の特集です。

平成二十一年十月二十三日発刊 五〇〇部限定
定価一、〇〇〇円（税込） 送料一〇〇円
編著・出版（財）中央義士会
TEL（〇四八）九九三―二五九一
FAX（〇四八）九九三―二五九二

有限会社 吉田商店
代表取締役 吉田 泰仁
函館市古川町 91 番 12 (〒 041-0262)
TEL (0138)58-3710
FAX (0138)58-3710
携帯 090-8898-5171

めしの種／清涼飲料水卸業
イベント・催事業
血液型／O型 星座／おとめ座
Birthday／/9月15日
趣味／阪神タイガースを心から愛する事
忠臣蔵（赤穂義士）の研究（当会理事）
幕末維新の研究
口称／寅さん FAMILY/嫁（定子）1人
ラッキー（パピコン）1匹

真実の忠臣蔵 史実の忠臣蔵
を探究するために会員に籍を置いている私です。
これからもよろしくお願い致します。

（財）中央義士会

評議員 丸山裕之

川崎市川崎区在住



東京都港区新橋 4-27-2
TEL 03-3431-2512
FAX 03-3431-2548
<http://www.e-monaka.com>
地方発送承ります。